五一　山ざくら我が見にくれば　はるがすみ峯にもをにも立ち隠しつゝ

語釈

山ざくら―山にある桜。山に咲く桜の花。山の桜。『日本国語大辞典』は用例としてこの歌を引く。

はるがすみ―春に立つ霞。「あをによし奈良山峡（か）ひよ白妙に此のたなびくは婆留加須美なり」（歌経標式）。

峯―山の頂。山の頂上の高い所。

を―山の高い所。↕「谷」。「木の暗れの繁き乎（を）上をほととぎす鳴きて越ゆなり今し暗しも」（萬葉集、巻二〇、四三〇五）

現代語訳

山桜を私が見に来ると、春霞が峯にも山の尾根にも立って、見るたびに隠しているよ。

五二　染殿のきさきのお前に花がめに桜の花をさゝせたまへるを見てよめる

年ふれば齢は老いぬ　然はあれど　花をし見れば物思ひもなし

語釈

染殿―藤原良房の邸宅。良房の娘明子が住んだので、「染殿の后」と呼ばれた。

染殿の后―良房の娘明子で文徳天皇女御、清和天皇母。→系図参照。

花がめ―花を生ける甕。『日本国語大辞典』は用例としてこの詞書を引く。

物思ひ―『日本国語大辞典』は用例としてこの歌を引く。

しかはあれど―「神代よりかくにあるらしいにしへもしかにあれこそうつせみに」

現代語訳

年月が経過したので歳を取ってしまった。そうではあるが、こうして満開の桜を見れば、なんら物思いもないことだ。

余釈

『枕草子』にこの歌の状況を再現したと思しき場面がある。（清涼殿の丑寅の隅）

『大鏡』には、「この殿ぞ藤氏の初めての太政大臣、摂政し給ふ。めでたき御有様なり。和歌もあそばしけるにこそ。古今にもあまた侍るめるは。さきのおほいまうち君とは、この御事なり。多かる中にも、いかに御心ゆきめでたくおぼえてあそばしけんと推し量らるるを、御女の染殿后の御前に桜の花の瓶に挿されたるを御覧じて、かく詠ませ給へるにこそ。年ふれば齢は老いぬ　然はあれど花をし見れば物思ひもなし、后を花にたとへ申させ給へるにこそ」

五三　渚の院にて桜を見てよめる

在原業平朝臣

世の中にたえてさくらのなかりせば　春の心はのどけからまし

語釈

渚の院―河内国交野郡にあった惟喬親王の別荘。『土佐日記』の記述「かくて、船引き上るに、渚の院といふ所を見つつ行く」から淀川の対岸。

たえて―否定表現を伴う強調の副詞。

せば―過去の助動詞「き」の未然形「せ」に接続助詞「ば」が付いたもの。多くは「まし」と呼応して、反実仮想を表す。

春の心―『日本国語大辞典』は用例としてこの歌を引く。

のどけし―「久方の光りのどけき春の日にしづ心なく花の散るらむ」（『古今集』、巻二、春下、八四、紀友則）

現代語訳

この世の中にまったく桜の花というものがなかったならば、春の季節を過ごす人の心というものは、どんなにのどかなことであっただろうに。

余釈

参照→『伊勢物語』八二段、系図、年表。